

芦屋大学論叢 第83号
(令和7年3月21日)抜刷

《研究ノート》

演劇的手法を用いた小学校中学年の授業実践とその改善

—児童の持っている学びの幅を広げることをめざして—

塩 家 崇 生

《研究ノート》

演劇的手法を用いた小学校中学年の授業実践とその改善

ー児童の持っている学びの幅を広げることをめざしてー

塩 家 崇 生

兵庫県伊丹市立鴻池小学校 主幹教諭

(芦屋大学臨床教育学部非常勤講師)

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症が2023年5月8日から5類に移行され、コロナ渦で制約されていたことが徐々に緩和されてきた。その中で改めて学校だからこそできる学びについて考えていく必要があると考える。学校とは知識や技能を習得するだけではなく、異質な他者と関わっていく中で社会性や協働性を育む場所である。2021年1月26日付け中央教育審議会による「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）¹⁾では「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実が求められると共に学校が全人的な発達・成長を保証する役割や人と安全・安心につながるができる居場所・セーフティネットとして身体的、精神的な健康を保障するという福祉的な役割をも担っていることが再認識されたとある。そこで、どの学級にでも学力・学習状況面等から支援を要する子どもがいることを想定した上で子どもたち全員に安心・安全な居場所づくりを行いながら状況に応じて自ら最適な学び方や内容を自分で判断できる授業づくりを目指したい。そこで本研究では「話す」、「聞く」、「読む」、「書く」といった従来の言語的なやりとりで行う学びだけではなく、新たに「演じる」といった学びを知り、実践することを通して児童の持っている学びの幅を広げることに着目していく。

ただし、学校教育における新たな試みへの拒否観（変化を嫌う、旧来の教育を守る等）を様々な教育現場で感じることは少なくない。演劇を取り入れた教育は海外の先進国では学校教育の中に深く入っているが日本ではあまり馴染みがないのもそれが理由の一つであると考え。しかし、現在文部科学省では小中学校等の授業時間の見直しや学校の裁量を拡大する方向での検討を始めており、次期学習指導要領への反映に向けた動向も各メディア等で報道されている。各学校で創意工夫について課題となるこの時期だからこそ一つの案として公教育における演劇を取り入れた教育を提案し、その可能性を示すことで学校教育に関わる関係者への一助としたい。

2. 研究の目的と方法

2.1 研究の目的

演劇的手法とは役になって架空の世界をつくり、その中でふるまうことで考えを深めたり何かを発見したりする学び方全般であり、役割演技や動作化、その他演じる学びについてもこれにあたる。それを国語科に限らず様々な教科で演劇的手法の持ち味を活かす実践を行い、その成果と課題について明らかにすることをねらいとする。なお、本稿では2023年度に筆者が所属する伊丹市立鴻池小学校の4年生児童対象に行った

実践について提示する。

2023 年 4 月に対象児童 87 名に行ったアンケート調査では「自分が伝えたいことを説明すること」や「自分の考えや意見を持って発表すること」が得意だと感じている児童が約半数に留まり、全体の約 2 割が苦手意識を持っていることがわかった。これらの改善を図るべく同年 4 月から年間を通して各教科や学級活動等において対話の場を設定すると共に活動後の振り返りを重視し、その内容を児童の活動に生かす取り組みを通して課題である自分の考えを持って交流することへの意欲向上を図ってきた。10 月には筆者が校内研究会において国語科『ごんぎつね』の授業公開を行い、事後検討会ではこれまでの取り組みについて発表を行ったが学力・学習状況面において支援を要する児童において言語的なやりとりのみについていけない児童に対する指導及び支援について課題が残った。そこで誰一人取り残すことない公正に個別最適化された学びについて授業改善を図る工夫の一つとして言語的なやりとりに限らない学びの可能性に着目し演劇を取り入れた教育について研究を行うことにした。

なお、演劇的手法としての「動作化」や「役割演技」を用いた授業実践は文献や教育雑誌等でも紹介がされており、各教科や教育活動等の中でそれらを用いた実践を見ることは珍しくない。しかし、渡辺貴裕(2018)²⁾はその活動は演劇的手法の持ち味が発揮されているものであったのかと警笛を鳴らす。この指摘については本研究を進めていく中で意識する必要がある。そこで、本稿における演劇的手法の持ち味が発揮されることについては、学習場面において演劇的手法を用いることで子どもたちが言語的なやりとりが多かった授業では得られなかった新たな気づきや納得が得られることと定義しておく。本実践後には演劇的手法を用いた授業が対象児童の有益な学びにつながったのかについて 2023 年 12 月と 2024 年 3 月に意識調査を行い、その結果を今後の演劇的手法を用いた授業改善に活かしていく。

2.2 演劇的手法を用いた授業づくりにむけて

まず筆者は演劇的手法を用いた授業を理解するためにそれを実践している立命館小学校の吉永かおり氏の公開授業³⁾を参観した。それをきっかけに協力依頼を行い吉永氏、俳優の F. ジャパン氏、傳田うに氏の 3 名から演劇的手法を用いた授業について学ぶ機会を得た。そこで学んだ授業実践を校内でも行い、その学びの可能性について本校でも教員と考える機会をつくった。

筆者（または対象学年）が 2023 年 10 月から 2024 年 3 月まで実施してきた活動実施概要を表 1 に示しておく。なお、内容については校内研究活動、校外活動（筆者が演劇的手法の研究を目的として参加した校外研修会）、個人研究活動の 3 つに分類している。

表 1 2023 年 10 月から 2024 年 3 月までの活動実施概要

年月日	内 容	授業者、指導助言者、協力者等
2023 年 10 月 10 日	（校内）伊丹市立鴻池小学校の校内研究会 内容：国語科『ごんぎつね』の公開授業（授業者は筆者）及び事後検討会	助言者 ・大阪大谷大学 教授 今宮信吾氏
10 月 30 日	（校外）立命館小学校演劇的手法国語科研究会 内容：国語科『ふつうってなんだろう』の公開授業及び事後検討会	授業者 ・立命館小学校 教諭 吉永かおり氏 ・俳優 F. ジャパン氏 ・俳優 傳田うに氏

11月～12月	(個人) 共同研究者とオンライン検討会 内容: 国語科『友情のかべ新聞』の教材研究及び授業実践計画について検討を行う (11月3日、11月10日、12月2日実施)	授業者 ・立命館小学校 教諭 吉永かおり氏 ・俳優 F. ジャパン氏 ・俳優 傳田うに氏
	(校内) 演劇的手法を用いた授業実践 内容: 国語科「世界にほこる和紙」、社会科「地域に貢献した人々」で演劇的手法(ホットシーティングや専門家のマント等)を用いた授業実践を行う	授業者 ・4学年担任3名(筆者含む)が各学級で実践
11月16日	(校内) 12月5日実施の俳優等との合同授業に向けてオンラインにて打ち合わせ	参加者 4学年担任3名 ・F. ジャパン氏
12月上旬～1月中旬	(校内) 演劇的手法を用いた授業実践とその調査 内容: 国語科『友情のかべ新聞』で演劇的手法を用いた授業実践を行う	授業者 ・4学年担任3名が各学級で実践
12月5日	(校内) 俳優等との合同授業① 内容: 国語科『ふつうってなんだろう』 伊丹市立鴻池小学校4学年3学級それぞれに俳優または演出家が2名ずつ入り、各学級で担任と共に授業を行う	授業者 4学年担任3名と ・演出家 大石達起氏 ・俳優 津野亜由未氏 ・俳優 F. ジャパン氏 ・俳優 夏目れみ氏 他俳優2名
12月14日	(校内) 俳優等との合同授業② 内容: 国語科『友情のかべ新聞』で登場する人物像について即興劇を通して深めていく	12月5日と同じ
12月18日	(校外) 立命館小学校演劇的手法国語科研究会 内容: 国語科『友情のかべ新聞』	授業者 ・立命館小学校 教諭 吉永かおり氏 ・俳優 F. ジャパン氏 ・俳優 傳田うに氏
2024年1月9日	(校内) 1月12日実施の俳優等との合同授業に向けてオンラインにて打ち合わせ	参加者 ・4学年担任3名 ・俳優 F. ジャパン氏 ・演出家 大石達起氏
1月12日	(校内) 俳優等との合同授業③ 内容: 国語科『友情のかべ新聞』の登場人物の心情変化について即興劇を通して深めていく	12月5日と同じ
1月20日	(個人) 演技法「ペラ・レーヌ・システム」のワークショップに吉永氏、F. ジャパン氏と共に参加	講師 ・俳優 近藤芳正氏
1月28日	(個人) 2月5日実施の『世界一美しいぼくの村』の公開授業に向けて子ども対象に行った模擬授業検討会に参加	授業者 ・立命館小学校 教諭 吉永かおり氏 ・俳優 近藤芳正氏 ・俳優 F. ジャパン氏 ・俳優 傳田うに氏
2月5日	(校外) 立命館小学校演劇的手法国語科研究会 内容: 国語科『世界一美しいぼくの村』	授業者 ・立命館小学校 教諭 吉永かおり氏 ・俳優 近藤芳正氏 ・俳優 F. ジャパン氏 ・俳優 傳田うに氏
2月8日	(校内) 伊丹市立鴻池小学校にて公開提案授業(授業者は筆者) 内容: 道徳科『いのちをつなぐ岬』(内容項目: 自然愛護)の学習の中で様々な演劇的手法を用いた授業実践を行う	助言者 ・京都女子大学 教授 村井尚子氏
2月～3月	(校内) 国語科『初雪のふる日に』で演劇的手法を用いた授業実践とその調査	授業者 ・4学年担任3名(筆者含む)が各学級で実践

本研究を進めるにあたり、先行研究として吉永氏の授業を4回⁵⁾ 参観した。4授業に共通することは(1)どの授業にも俳優が入っていること、(2)全体交流でなりきる人物の情報を確認すること、(3)グループ活動で即興劇をつくることの3点である。演技のプロである俳優でさえ、なりきる人物の情報が理解できていなければ演じることは難しいということを押さえ、それぞれの人物像を教材の文中から探したり、俳優または子どもが即興で演じたりしながら全体で確認をしていく。これが子どもたちの前理解となる。その後、グループ活動でテーマに即した即興劇づくりを行う。グループ活動では教師及び各俳優によってそのアプローチ方法は異なるが、

(1)設定…即興劇に登場する人物と置かれている状況について確認する

(2)構成…どのような物語となっているか確認する

(3)演出…(2)をよりリアルな(自然な)状況にする

の3点について子どもたちの活動を認め、励ましながら指導及び支援を行っていた。

特筆すべき点は授業者の出どころと出方である。子どもたちの活動状況を見極めながら教師、俳優それぞれが各自の強みを理解し、それを活かしたアプローチ方法(教師は教科指導、俳優は自身の役作りの経験から)で子どもたちの即興劇づくりに積極的に関わっている姿が印象的であった。特に俳優の演出については五感を働かせ、それに根差した想像力を発揮させるような力業であった。俳優が映画やドラマ、または舞台上で与えられた役を演じる際、それを観客がよりリアルに感じるために演出家のコメントからヒントを得るのと同様、子どもたちのグループ活動についても演出家のような存在が教室内にいることは大きい。これまでの授業で考えた事もなかったような視点からの助言が即興劇づくりを通して得られ、それがさらに自身の読みに変化を生む。子どもたちがこの授業を楽しみながら学んでいる大きな理由の一つだと感じた。



図1(左) 児童や俳優等を入れて行う即興劇を通して人物像を確認する吉永氏
(左から吉永氏、筆者⁶⁾、F氏、傳田氏 2023年12月18日立命館小学校授業より)

図2(右) 児童と俳優の津野氏で繰り広げられる即興劇を見る演出家の大石氏
(2023年12月14日伊丹市立鴻池小学校授業より)

本校でも俳優等と共に授業を2023年度は3回⁷⁾ 行う機会があったが、やはり演劇に関わってきた俳優や演出家のアプローチ方法は教科教育のそれとは異なっていた。

従来の国語科の授業では教材に出てくる中心人物に焦点を当て、情景描写や比喻等の表現から人物の心情理解を図っていく。しかし、俳優等と共に授業ではその周りにいる人物(またはいるであろう人物)にも焦点があてられ、どのような状況にいて他の登場人物とどのように関わったのか(もしくは関わらなかったのか)について想像力を大いに活用する。劇づくりを通して想像することでまた新たな気づきや問いが生まれ、それを活かして劇づくりを行う。その繰り返しの通すことで表現と理解が相互循環され、そこから一人一人の読みがさらに深まっていく。

図2は2023年12月14日に本校で行われた授業の一場面である。俳優の津野亜由未氏と児童が登場する二人の男子になりきって一つの場面を即興で演じている。ただしこれが一回では終わらない。一つの演技が終わるとそれを見ていた子どもたちに感想を聞き、それを踏まえて演出家はその演技に価値付けしたり、演出を行ったりする。お互いの関係性が明確になるように立ち位置や口調、声の強弱、表情、目線、歩くスピード…それらを全体で確認しながらさらに再演を試みる。(演技者を別の子どもに変えて行うこともある。)この繰り返しがまさに表現と理解の相互循環といえる。

ただし、日常行う授業では俳優はもちろん複数の教師が授業を行う機会は多くない。そこで俳優等と共に行った授業実践を活かして行った一授業一教師で行う演劇的手法を用いた授業実践記録を次に示していく。

3. 結果

2023年11月から本校でも演劇的手法を用いた授業を導入していった。本章では授業展開の中で学習状況に応じて行った演劇的手法の実践と複数の演劇的手法を取り入れた道徳科授業実践を示していく。

3.1 授業展開の中で学習状況に応じて行った演劇的手法の実践について

国語科の説明文『世界にはこる和紙』において子どもたちは内容を理解した上で実際に筆者になりきって和紙の魅力についてインタビューの質問に対して答えたり力を動画配信風に語ったりする活動(専門家のマント)を行った。

また、社会科『地域(伊丹市)に貢献した人々』の学習では奈良時代に昆陽池、院前池等の5つの灌漑用水地や2本の溝を作る等の公共施設の整備を主導した行基の功績について学んだ後、行基が現在にタイムスリップをし、記者会見を行うという設定の中で子どもたちが行基役と記者役になりきる活動を行った。



図3 記者会見で語る行基役(左)と記者役

国語科の学習では説明文の内容理解を図ることをねらいとした。本活動では回答者及び質問者共に教科書の内容理解が不可欠である。本活動は演劇的手法を用いた初めての実践であったため子どもたちの取り組みに対する興味・関心が高く、その活動に参加するために教科書を積極的に読もうとする姿が見られた。このことより子どもたちは教師から促されなくても自ら教材に向き合う必然性が生まれたと考えられる。社会科の学習では、前述の国語科とは違い教材には書かれていない行基の想いについても質問してもよいという指示を出した。理由として、行基がなぜ当時の権力者から弾圧や禁圧をされたにも関わらずその禁を破り仏教を人々に教えたり社会事業を指導したりしたのかを子ども自身なりに考える機会としたかったからである。「どうして行基さんは伊丹市に池を作ろうとおもったのですか」、「行基さんは伊丹市の人にとどのようなことを伝えたかったのですか」といった問いは教科書には書かれていない。行基の想いについて子どもたちは行基になりきることで自然と考えることができたと考える。また、あるグループでは「池はどのような材料で作ったのですか」という記者役の質問に対して行基役は「材料?…」と詰まってしまう場面も見られた。質問内容を教科書内容内に制限しないことで新たな疑問と出会うこともできることもこの手法の持ち味といえるだろう。

3.2 複数の演劇的手法を取り入れた道徳科授業実践

2024年2月8日に実施した道徳科授業は俳優等と共に行った授業と同様90分授業で行った。俳優等と行った授業と同様の流れで行いながら状況に応じて演劇的手法を取り入れて展開した。授業展開の内容については表2で示す。

表2 道徳科授業『いのちをつなぐ岬』の授業展開と演劇的手法

時間	授業展開	演劇的手法	活動者
0分	・ テーマ提示「自然を愛すること」		
3分	発問「テーマのイメージについて」		
5分	・ ウミガメについて紹介		
9分	・ ウミガメを世話する人たちの紹介 保護監視員の紹介		
10分	・ 保護監視員になりきる	心のせりふ	3名
12分	・ 全体交流		
16分	・ ボランティアについての紹介		
19分	・ ボランティアになりきる	心のせりふ	2名
21分	・ 全体交流		
23分	・ ボランティアになりきって質問に答える	ホット・シーティング	1名
26分	・ 世話をする小学生の紹介①		
27分	・ 世話をする小学生になりきる	マイム	全員
28分	・ 全体交流		
36分	・ 世話をする小学生の紹介②		
39分	・ 活動説明「これまでの学習を活かして30年後の御前崎浜を舞台に『自然を愛すること』をテーマに即興劇をつくる」		
41分	・ 各グループで即興劇づくりをする 6グループ（各4～6人）それぞれで登場人物の設定や物語の構成、劇練習を行う	即興劇	全員
70分	・ 即興劇発表	即興劇	4グループ
82分	発問「自然を愛するために大切な心とは」		
90分	・ まとめ、ふりかえり		

3.2.1 演劇的手法「心のせりふ」と「ホット・シーティング」、「マイム」

「心のせりふ」は筆者が2024年1月20日に俳優の近藤芳正氏から演技法「ベラ・レーヌ・システム」を学ぶ中で体験した活動を本授業で取り入れたものである。普段の生活の中で口には出さないが心の中で流れているせりふは、演技法「ベラ・レーヌ・システム」の中でも根幹となるという本演技法を作



図4 黙々と無言で作業をする保護監視員役の児童

り上げたベラ・レーヌは「まず土台の中に心のせりふがあって、その結果出てきたのが外の（活字の）せりふである」と持論を述べる。これを踏まえ本実践では、保護監視員やボランティアが黙々と作業をしている時、またウミガメのための活動を行っている時等、心の中ではどのようなことを考えているのだろうかとい

うのをその役になりきること考えることをねらいとした。図4は3名の児童が教室の中央に集まりウミガメが砂浜に産んだ卵を保護する活動をなりきって演じる場面である。黙々と無言で砂浜を掘ったり卵を運んだりしているのを演じている中、授業者が肩を触った時だけ今思っていることを言葉に出して言う活動である。

表3 保護監視員役として「心のせりふ」を行った児童の発言

経過時間	発言者	児童の発言
0 秒	保護監視員役 3 名	※無言で保護監視員役になりきって演じる
20 秒	保護監視員役 A	えっとね僕はね、やっぱ卵はウミガメが頑張ってるんで大切にしたいと思いますよ
40 秒	保護監視員役 B	ウミガメの卵、産んだばかりだから強く触ったら割れるかもしれへんから保護するんやったら優しくゆっくりせえへんと…
70 秒	保護監視員役 B	元気に生まれてくるといいなあ
90 秒	保護監視員役 C	ウミガメの赤ちゃんたち、かわいそうだし、しっかりとお世話をしてあげないとな

3人が演じた活動が終わった後、学級全体で見た感想を交流した。「ウミガメの赤ちゃんを大切にしている様子がわかった」、「かわいそうという言葉が出ていたからウミガメのことを考えて活動しているのがわかった」という心のせりふの中から出てきた言葉に注目した児童がいる中で「3人で行ったり来たりして作業している様子を見て、それ



図5 砂浜を巡回するボランティア役の子ども（心のせりふ）

だけ卵がたくさんあるのがわかった。」と演じている動きに注目した児童がいた。活動時間がとても長く、また作業が大変そうということが演じることを通して学級全体で確認することができた。その後ボランティアの仕事内容について説明をし、指名した2名の児童がその役になりきって「心のせりふ」を行った。

表4 ボランティア役として「心のせりふ」を行った児童の発言

経過時間	発言者	児童の発言
0 秒	ボランティア役 2 名	※無言でボランティア役になりきって演じる
20 秒	ボランティア役 A	ウミガメ頑張ってる産もうとしているのに、なんかめっちゃ捨てて迷惑やと思わんのかな
40 秒	ボランティア役 B	ウミガメが卵産んでウミガメの足跡があるけど、卵かえっているのかな
60 秒	ボランティア役 A	それにしてもちょっと疲れたな
90 秒	ボランティア役 A	ウミガメってこんなゴミだらけのところで卵産むのって嫌な気持ちするやろうな
110 秒	ボランティア役 A	えーいつもこんなやからウミガメかわいそうやわ
120 秒	ボランティア役 B	ウミガメ大丈夫かな、絶滅とかせえへんかな
130 秒	ボランティア役 B	ウミガメの卵、これで生かせるな

この活動のあとにも保護監視員と同様、学級全体で感想を交流した。ゴミ拾いを続けるボランティア役の動きを見て「本当にゴミが多いことがわかった。ウミガメがかわいそう」、「ちゃんとウミガメの気持ちを考えてあげている。」という感想がでてくる中でボランティア役の一人が言った「疲れたな」という言葉に対して思ったことがある児童がでてきた。(表5)

表5 ボランティア役の言葉に注目した子どもが発言した後の授業展開

発言者	発言
児童 A	ボランティアのことなんやけど、ボランティア役 A さんが「疲れたな」って言ってたけどウミガメのために頑張ってくれている
授業者	確かに疲れているけど疲れていたらやめるよね
児童 A	やめる、普通ならやめる
授業者	ちょっとインタビューしてみようか（ボランティア役 A に対して）どうぞ ※教室前方のイスに座らせる 【「ホット・シーティング」開始】 今日は疲れたと言っていたけども続けたボランティアの方に来ていただきました こんにちは
ボランティア役 A	こんにちは
授業者	その時の率直な気持ちをお伝えください
ボランティア役 A	いやあ、本当は疲れて家に帰りたいけどウミガメが頑張ってる産もうとしているのにゴミだらけで帰ってしまうのは嫌だったので疲れていただけゴミ拾いをしました
児童 B	（ボランティア役 A に対して）質問ある ボランティアの A さん、ウミガメはどれくらい好きですか、疲れているけど帰らなくてことはどれくらいウミガメのことを思っているのですか
ボランティア役 A	えーやっぱりボランティアなんでボランティアをやっている時はウミガメのこと一番に思っています
児童 C	ゴミの多さってゴミがほんまにめっちゃ多くって、どういう思いで拾ってたんですか
ボランティア役 A	やっぱりなんかゴミ捨てた人は、まああかんと思うし…普通ゴミ持って帰るやん、しかも海…自然とかさウミガメとかに迷惑かけてるからやめてほしいなって気持ちで拾っていましたね
児童 D	なんかちょっと…5 月から 9 月までボランティアって書いてあるから夜・朝見回りするってそれってなんか自分的に疲れるし、ちょっと面倒くさいですか
ボランティア役 A	でも初めは面倒くさかったりしたけどだんだん調べる…なんかボランティアやっていくことでなんかウミガメのことが好きになってきて今では面倒くさいって気持ちはあんまないかな
授業者	ありがとうございました

「心のせりふ」で演じていた子どもの言葉「疲れたな」に対する問いが全体交流の中で出てきたため演じた子どもに対してインタビューを行う「ホット・シーティング」を行うことにした。急な展開にも関わらずボランティア役 A を演じた児童がなりきって質問者の問いに答えていた。そもそも「疲れたな」という言葉が出てきた背景にはボ



図6 ボランティア役に質問する（ホット・シーティング）

ランティア役 A が連続して「心のせりふ」を言うことになったことによって自然と出てきた言葉である。言語的なやりとりだけではなく演じたからこそ出てきた本音の部分が出てくるところも演劇的手法の持ち味といえるだろう。「疲れたけど、やめなかった心」を考えるきっかけとなった学習場面であった。

保護監視員が育てたウミガメの赤ちゃんを育てる近隣の小学生については児童一人一人に子ガメを持つ仕草や世話をするふりをする「マイム」を行った。ある児童はこの活動を行う最中に「世話ってどうするの？ミルク飲むのかな？」とつぶやいていた。これも演じたからこそ新たな疑問が生まれ、それに対して興味関心を持つ機会となったのではないかと考える。

3.2.2 演劇的手法「即興劇」

授業内で共有した情報を活かしながら各グループに分かれて即興劇づくりを行う。内容は本時のテーマ「自然を愛すること」をイメージしながら30年後の御前崎浜を舞台にすることとし、そこに出てくる登場人物の設定や物語の構成、演技方等は各グループのメンバーで考えていく。活動時間は30分間とした。授業者はそれぞれのグループの活動内容を確認しながら設定や構成、また演出について状況に応じて指導及び支援を行った。その後、希望したグループによる即興劇の発表を行った。本実践では4つのグループが発表した。(表6)

表6 全体で発表した即興劇の内容

	即興劇の内容
1	第1話 砂浜で花火をする人とそれを注意するボランティアとのやりとり 第2話 ウミガメの産卵をカメラで撮ろうとする人とそれを注意するボランティアとのやりとり
2	第1話 清掃中のボランティアのお手伝いをする小学生とのやりとり 第2話 ウミガメの卵を保護する保護監視員とそれに対して感謝を述べる地域の人とのやりとり
3	第1章 ウミガメの世話をする保護監視員が小学生と一緒に卵を掘り出す作業をし、ボランティアがゴミ拾いをしている 第2章 (第1章から数か月後が経ち) 保護監視員が小学生に子ガメを託すやりとり 第3章 (第2章から数か月後が経ち) 小学生が育てた子ガメを海にかえす様子
4	第1章 子ガメを海にかえす小学生 第2章 (第1章から30年後) 40歳になった元小学生が保護監視員となり、小学生にウミガメの卵を保護していることを教えている

4つのグループの即興劇を見たり、これまで学習してきたりしたこと等を通して本時のテーマである「自然を愛する」ために大切な心とは何かを全体で交流した。児童からは「まずは自然が大切であることに気づくこと」、「この行為が自然にどう影響するのかを常に考えること」、「今、自分が(自然愛護の観点から)できることを考えること」、「自然の中にある命を大切にすること」、「地球を使わせてもらっているという責任を持つこと」という発言があった。



図7 道徳科授業「いのちをつなぐ岬」の板書

4. 実践を終えて

演劇的手法を用いた授業については2023年10月下旬から始めたため、児童には2学期末時点の12月と学年末の3月の2回、演劇的手法を用いた授業に関する意識調査を行った。結果は表7である。

表7 演劇的手法を用いた授業に関する意識調査結果（％）

質問項目	2学期末 (12月)		学年末 (3月)	
	好意群	非好意群	好意群	非好意群
授業の中で演劇を通して学習することは好きですか	80.5	6.9	85.9	4.3
自分が演じたり、友達が演じているのを見たりすることで自分の読みを深めるのに役に立ちましたか	78.2	8.0	83.7	4.3
演劇の授業によって物語の内容について考える時間は増えましたか	87.4	3.4	87.0	1.1
演劇の授業によって登場人物の人柄（ひとがら）や性格などについて感じる時間は増えましたか	81.6	3.4	81.5	0.0
演劇の授業によって物語の世界を体感する時間（※まるでその世界に自分が入ったような感じ）は増えましたか	75.9	5.7	84.8	5.4
演劇の授業によって物語の世界や登場人物の状況、気持ち等について想像する時間は増えましたか	81.6	3.4	80.4	3.3

演劇的手法を用いた授業は導入段階から児童の反応は良好であり、言語的なやりとりだけでは授業の中で考えを持つことが難しかった児童にとっても身体を動かすことにより考えることができた。また、意識調査結果からどの質問項目において全体の約8割が演劇的手法を用いた授業を好意的に感じていることがわかった。ただし、授業者として難しいと感じたのは児童の活動における指導や支援についてである。例えば即興劇の場合は各グループが分かれて行うため限られた時間の中で学習状況を見取り、それによって指導もしくは支援、または見守ること等を授業者が判断する必要がある。

演劇的手法は児童にとって表現が子ども一人一人に委ねられることで自由度が高く、一見すると遊んでいるようにも見える。しかしその過程が良い対話を生むこともある。また、授業者の適切な関わりがより深く考えるきっかけとなる。そこで今後の研究活動として授業者が児童の活動をより適切に見取るポイントや指導及び支援方法について整理していく必要があるだろう。

従来の学びでは得られなかった児童の想像力を向上させ、それを自覚させることでさらに意欲関心が高められるように引き続き研究を行っていく所存である。

5. 今後の研究について

言語的なやりとりだけで学ぶ授業では、どうしても学力・学習状況等で支援を必要とする児童が活躍できる場面は少なかった。しかし、演劇的手法を用いた授業では劇を通して本文に書かれていないことを読むことが多く、自身の体験と重ねて考えることができることからどの児童にも活躍できる機会があった。それが多くの児童が好意的に捉えた大きな理由の一つと言えよう。「話す」、「聞く」、「読む」、「書く」といった従来の言語的なやりとりのみで行う授業だけではなく、「演じる」といった学びに着目したことで児童の学び

方の幅を広げる機会となったのではないかと考える。これをきっかけにし「本文の言葉を手がかりに考えることが得意」、「言葉の意味やイメージから考えることが得意」、「演じることが得意」、「音読が得意」、「他教科の視点から考えることが得意」等といった児童一人一人が得意分野を存分に発揮し一つの学習をクラス全員で多面的・多角的に深めていける学級及び授業づくりを目指していく。本実践では自身の学びに対する自覚や問いづくりといった個の学びに対する課題が浮き彫りになった。今後は改善が見られた振り返り記述や探究活動等における指導及び支援は継続して行い、一人一人の児童の意識変化について 2023 年 4 月と 2024 年 3 月の 2 つの児童意識調査結果から比較検証をしていく。

また、課題が見られた授業方法や学習活動の内容等については誰一人取り残すことのない学び（学習の孤独化に陥らない学び）となっているかという観点で改善を図り、児童一人一人が主体性を持って自身の読みを確立し、それをより深めようとする資質・能力の育成にあたっていく。

謝辞

本研究を進めるにあたって、授業実践及び調査に協力してくださった伊丹市立鴻池小学校の 2 名の先生方及び共に授業実践に参加していただきました F. ジャパン様をはじめとする俳優や演出家の皆様、また授業づくりにご助言をいただきました立命館小学校の吉永かおり様、俳優の近藤芳正様、傳田うに様、京都女子大学の村井尚子教授に心から感謝いたします。

引用文献

- 1) 中央教育審議会(2021), 「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」(答申) 【本文】, https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto_02-000012321_2-4.pdf (2024 年 10 月 13 日閲覧)。
- 2) 渡辺貴裕(2018)「演劇的手法を切り口にした国語科の授業づくりと評価の問い直し」, 『全国大学国語教育学会・公開講座ブックレット』7 巻第 3 章, pp.23-35。
- 3) 2023 年 10 月 30 日に立命館小学校教諭の吉永かおり氏が俳優の F. ジャパン氏, 傳田うに氏と共に演劇的手法「エチュード×ことば」をテーマとして 4 年国語科『ふつうってなんだろう』の公開授業及び研修会を行った。
- 4) 2023 年 11 月から 12 月にかけて令和 6 年度光村図書 4 年の国語教科書に新たに掲載される『友情のかべ新聞』の演劇的手法を活かした授業展開について吉永氏, F 氏, 傳田氏と共に検討を行った。それを踏まえて, 立命館小学校と本校 4 学年でそれぞれ実践を行った。
- 5) 立命館小学校で行われた演劇的手法国語科研究会の第 3 回(2023 年 10 月 30 日実施), 第 4 回(2023 年 12 月 18 日実施), 第 5 回(2024 年 2 月 5 日実施)及び第 5 回の事前授業として京都市下京区にあるアートコミュニティスペース KAICA で行った授業(2024 年 1 月 28 日実施)の 4 回。
- 6) 筆者も主人公の友達役として立命館小学校の小学生や俳優と共に即興劇に参加した。
- 7) 本実践は文化庁令和 5 年度文化芸術による子供育成推進事業(芸術家の派遣授業)により 2023 年 12 月から 2024 年 1 月の間に 4 学年 3 学級を対象として俳優等と共に行う授業を行った。各学級に 2 名の俳優等が入り, 担任と連携して国語科授業(90 分)を実施した。

Abstract

Practice and Improvement of Teaching in the Middle Grades of Elementary School
Using Dramatic Techniques

—Aiming to expand the range of learning possessed by children.—

Takao Shioya

This study aimed to broaden the range of learning that children can practice according to their own learning situations by learning new learning styles such as "acting" in addition to the traditional learning styles of "speaking," "listening," "reading," and "writing" through the practice of teaching with drama techniques to 4 th graders for about 4 months. This is the purpose of this project. In this paper it is shown that we aimed to create classes in which the characteristics of the theatrical method are demonstrated, and that we repeated the practice in the research school, observing classes that had practiced before us and having them cooperate with us. Although the results of the students' perception survey showed that many points related to this study were positively accepted by more than 80% of the students, we insist on the necessity of organizing the points where the class teacher can better observe the students' learning activities and the methods of guidance and support.